学会報告

第15回発表集会印象記

富山県保険課　熊谷　武夫

第15回富山県農村医学研究及び健康管理活動発表集会は2月21日（土）13時30分から、厚生連高岡病院2階の地域医療研修室（Ⅰ）で開催されました。

当日は晴天に恵まれて，病棟の新築工事の槌音が聞こえる中で，県下の各地から約60名の参加があって盛会でした。

会長の越山先生は開会のご挨拶に続いて，「生老病死を垣間見る」の題で特別発言をなさいました。

「20世紀後半のマクロとミクロの科学技術の進歩発展は，我々の生活を極貧のそれから，富裕の暮らしに変化させ，物質的には生活は豊かになったが，その一方で農業をはじめとする一次産業が等閑視されるようになった。

農業は生命産業であり，いまこそ生命産業である農業を見直して，人間的な生き方を考え直すべきである。

現在問題になっている心の健康問題，社会の倫理，環境問題を解決出来るのは，農村医学である」とお話になりました。

座長の渡辺先生は，「我々の生き方を宇宙の根元から考え直す必要があるのではないか」とコメントなさいました。

14時8分からは引き続き渡辺先生が座長をなさって会員発表に移りました。

第1席のＪＡ氷見市の曲さんは「高齢者助け合い組織『結の会』の活動について」と題して，平成3年に開始された農協のホームヘルパー養成研修に参加した女性部の役員の方々が平成5年に設立した「結の会」の活動状況を報告されました。

第2席も同じく入善町農協に結成された「つくしの会」の活動状況について，清水さんが「入善町農協における高齢者福祉活動の現状と課題」として報告されました。

氷見市では床鍋地区に「いこいの家（ミニ託老所）」を開設しておられ，また入善町ではヘルパー派遣事業も実施しているとのことでした。

このテーマは介護保険の導入を前にして，会員の関心も高く，フロアから質疑が多くありましたが，両演者ともに今後は農協内部の助け合いに止まらず，市町村のホームヘルプサービスも組織として受託して行きたいといった意向を述べられました。

第3席の大浦さんは「『命の営み』との関わりの実態」を発表されました。

農業は昔から，家畜や農作物との関わりから，命の営みに触れ，命を慈しむ心を育む大きな役割を果しているが，昨今の「命を軽視した犯罪・事件」の頻発は，農業が衰退しつつあるために，様々な「命の営み」との関わりが希薄になったためではないかと考えて，「子供時代に記憶に残る生き物の世話をした経験」についてアンケート調査が実施されたとのことでした。

この結果は越山会長の特別発言の内容にも関連のある事柄と思われましたが，対象者の8割は「子供時代に生き物の世話をした経験

が人生に良い影響を与えた」と考えており，また現在，生き物を世話している人は，命の営みに感動する傾向が，そうでない人よりも強かったと報告されました。

演題4から演題7については高岡病院の亀谷先生が座長をされました。

まず14時58分から，第4席の滑川病院院長の小川先生が「大腸癌検診の成績と問題点」として，滑川検診センターで昭和55年以降の12年間にに実施された便潜血反応によるスクリーニングによって発見された大腸癌患者は，男32，女12名で，受診者の0.1%であって，これは全国集計の0.15%に比べて低いこと，二日あるいは三日連続して採取した検体の2つあるいは3つともに陽性であった被検査者の癌発見率が高かったことを報告されました。

そして大腸癌検診の受診者は，検体は必ず2個（2回分）を提出すること，毎年受診すること，精密検査は必ず受けることが大切であると結ばれました。

小川先生は滑川検診センターでの検診事業について，これまでも何度も発表なさっておられますが，今回も大腸癌検診について膨大な資料をおまとめになり，その真摯なご努力に感銘しました。

第5席の高岡検診センターの福田さんは「二次検診受診率向上の検討」を口演されました。

日帰りドックにおける胃検診の要精検者には，これまで受診後4か月後に二次検診（精密検査）を勧奨する調査書を発送していたのを，受診後2か月と4か月の二回に増やして，二次検診受診率の変化を検討されたものでした。

しかし平成9年度においては受診率の向上は認められず，また受診者の過去の胃カメラ経験の有無も二次検診の受診率には関係がなかったと報告されました。

大腸癌検診の小川先生も強調されたように受診者にとって，精密検診の受診はなかなか実行されにくいようで，越山先生は，「二次検診の費用の負担が大きいために受診しないのか」と質問なさいましたが，私は保健センターで保健婦さんが実施していた受診勧奨の効果を調査した経験から，特に働きざかりの世代の男性は，仕事を休んでまで受診したくないと考える人が多いのではないかと思っています。

第6席の本所健康管理課の山下さんは「20才代，看護職員の食の実態」を報告されました。

高岡病院の20才代の看護職員180名を対象に昨年2月27日の家業，婚姻状況，居住形態，勤務形態，食事場所，主食の内容，野菜の摂取状況，飲物の摂取状況について調査が実施されました。

その結果朝食の欠食者が27.4%と多く，未婚で寮・下宿に居住する者の欠食率が高いと報告されました。

この点はフロアから「非常に憂うべき現象」との声がでましたが，看護科の方は「三交代勤務の特殊性が調査の際に考慮されておらず，実際には前日の準夜勤者も時間をずらして朝食はとっているのではないか」と発言されました。

食生活を含めて生活習慣改善か叫ばれています。またいろいろな職場で産業医学の観点からも労働環境を改善しようとする努力もなされています。

そんな中で，病院の看護婦の勤務形態は依然として三交代勤務が続いています。

この演題の討論でも指摘されたように，たとえ「二・八運動」が徹底したとしても，個人の生活リズムを考えると，三交代は非生理的な勤務スケジュールであると思います。

最近では，女子の深夜労働も認められましたので，長い間日本の病院で続けられていた看護婦さんの三交代勤務も，すでにヨーロッパ等で行われているように，夜勤は夜勤専門の看護婦さんが準夜と深夜を通しで勤めると

いった勤務形態に改正されるべきではないかと思います。

第7席の滑川検診センター新田さんは「生活習慣の見直し」と題して，間食の習慣と肥満度等の相関関係を調査した結果を報告されました。

毎日調査用紙にシールを貼ることによって被調査者自身に，間食の状況を自覚させ，間食の習慣を改善して貰う意図があったようで，この調査を機会に間食の習慣を改善できた人は少なかったそうです。

座長の亀谷先生は「肥満治療の一環としての調査である」と話されました。

15時53分から小川先生が座長を勤められました。

第8席の富山市の北川先生は，本年1月に国際協力事業団の医療協力に同行して，ブラジルのカンピーナス大学等を訪問され，更にその近郊の農場を視察された経験を豊富なスライドを駆使して発表されました。

北川先生は昭和45年から5年間，高岡病院の第一内科部長をお勤めになってから開業されましたので，農医研には最初から参加されており，現在も理事としてご活躍中です。

第9席の富山県衛生研究所の中崎さんは「有機リン系農薬の尿中代謝物の追跡調査」を報告されました。

農業に従事して，農薬散布作業をしている対象者のみならず，コントロールとして農家以外の人も調査した結果，農家の人が散布作業後に尿中の代謝物が増加している他，散布時期以外でも，またコントロールの人にも微量の代謝物が認められ，残留性が低いとされている有機リン系農薬が，長期間にわたって体内に残留していると話されました。

第10席は「当科におけるアレルギー鼻炎の現状」と題して，高岡病院の豊田院長先生が，Ⅰ型アレルギーである本症の花粉症との関連や，抗原の証明としてのＣＡＰ－ＲＡＳＴ法を371例に実施された成績などをご報告になりました。

本症の発症には，素因の上に，スギ，イネに対する過敏が関連していると話されました。

最後に高岡病院の長瀬さんは，第11席で「HbA_{1C}値と尿路感染との関連」を口演されました。

Ⅰ病棟4階の平成8年度の糖尿病の入院患者70名について調査された結果，血糖のコントロールの不良な高齢の女性が尿路感染を起こしやすいと結論され，看護者として尿路感染の予防に心掛けたいと結ばれました。

これに対して座長の小川先生は「糖尿病の患者さんは神経因性膀胱になりやすいが，これと尿路感染の関連はどうか」と質問され，亀谷先生は「神経因性膀胱の有無は調べなかったが，女性の方が尿路感染が多かった」と話されました。

越山先生は「現場の看護婦さんの観察で，このような報告がなされることは素晴らしい」と称賛され，16時55分に閉会しました。

今回も，保健福祉の分野を含めた演題が，種々の職種の方々から発表されて，有意義な集会でした。

会員の皆様のますますのご活躍を祈念し，お世話頂いた大浦さんをはじめ事務局の皆さんに深謝して稿を終わります。

(1998-02-26記)